

のぼろ

〇〇の話

帝国少年作品集
ベルファダインTRC 20

WARNING! THIS IS UNPLEASANT WORK, FICTION, ADULT ONLY

警告

- この作品集に収録されている作品は全てフィクションです。
- この作品集は成人向けです。未成年の方は閲覧しない様ご注意ください。
- この作品集には多くの方が不快感、嫌悪感を抱く表現があります。それら表現を不快に思われる方、嫌悪感を抱かれる方は作品集を閲覧しない様ご注意ください。

WARNING

- All works contained within this collection are fictional.
- This collection is intended for mature audiences. Minors should not view this content.
- This collection contains depictions that many may find disturbing or offensive. Those who may find such depictions disturbing or offensive should not view this collection.

この作品集について

- この作品集は[アナログゲームのルールブック]に見せかけた画集です。
- この作品集の表現方法は乱雑です。
- この作品集の構成、編集は乱雑です。
- 収録されている作品の完成度はバラバラです。完成品もあれば、未完成も収録されています。

About This Collection

- This collection is an art book disguised as a rulebook for analog games.
- The expressions used in this collection are disorganized.
- The composition and editing of this collection are disorganized.
- The completion status of the included works varies. Some are finished, while others are unfinished.



自販機の話

霧深い夜の道を歩いていると自販機が見えた。喉が乾いていたので小銭を押すと『横の方』から「ガタン」と音がする。

「えっ?」とそちらを見ると数m程離れた所にも自販機があつた。どうや
ースがでたらしい。

へえう……何で……？」と思つていると、何処に居たのかスツと《男》が現れ、
の闇へと消えていった……

一瞬へ男が自ら小銭を入れ買ったのか……とも思ったが、その立ち位置は無理の様に思えた。

へという事は、あいつは俺のジューズを持っていたのか？そもそもこの自販
混線（？）でもしたのだろうか……

いぶかしがりながらその自販機に近づくと後ろから自販機に小銭を入れ
その瞬間わかった。



「ガタン」

私は黙ってジュースをとって《あの男》と同じ様に霧の闇へと歩いていった。

《もしあの時振り向いて自分を見てしまったら…》

その事を思うと今でも恐怖を感じ、以来自販機には近寄らないようにしている…

聞き込みの話

通り魔事件に借り出され、現場で指揮を取っていると脇に一人の女性がたたずんでいた。見ると学生服姿の美少女で時刻は夜の8時。

おそらく部活か何かで帰りが遅れたのだろう…

へという事はココは通学路なのかもしれない…

望みは薄いが物は試しと事件について聞いてみた。

「やあこんばんは。実はついさっきココで通り魔事件があつてね…君、今帰りかい？」

「ええ」

「そうか…それでもし知っていたらでいいんだけど…最近この付近で何か変わった事とか…その…この件に関わりがありそうな事、知っているかな…？」

「…知っているわ」

驚いた！まさかこんなに早く手掛かりを掴めるとは！

私は急いで手帳を取り出した。

「で、それはどういった事なんだい？」

「被害者の女性には付き合っていた男性がいたのだけれど最近捨てられたの。

それで彼女、その男性を恨むようになって…」

男性には妻子がいて彼女、自分達の関係をばらすって男性を脅したみたい…」

「ちよつ、ちよつとまつて！君は被害者と知り合いなのかい？、その…親戚とか…」

「いいえ」

「じゃあ君は何でそんなに詳しく知っているんだい？」

「彼女に聞いたんです」

「彼女？被害者の事？」

「はい。今あなたの隣りに立っています」

「?!」

「彼女、憎しみをぶつける対象にあなたを選んだみたい…」

男なら誰でもいいって言ってます。気をつけてくださいね」

そういつて、その少女はスタスタと去っていった。

たつぷり10秒間ポカンとして…そして徐々に怒りが込み上げてくる！

「なんなんだあの子は！大事な捜査を馬鹿にしてー！

君もそう思わないか？！」

つい声に出して隣りの婦人警官に話しかけるとその顔が被害者の《それ》だった。

「え…？」

ドンと押される。

そこは高台で柵の向こうが数十メートルの崖になっていた。

〈そういえば婦人警官なんていなかったっけ…〉

そう思いながら私は柵の向こうへと転げ落ちた。

〈もうだめだ！〉と思つて目をつぶつた瞬間、パシッと手首をつかまれガクンと落下がとまる。

恐る恐る目を開くとそこには先ほどの少女がいた。

岩肌に片手をかけ、もう一方の手で私の体を支えている。

「ね、本当だったでしょう？」



そういつて微笑む少女の瞳はランランと火色に輝いていた。

幽霊の存在も怖かったが、私の体を楽々と支えるその少女も怖かった。
どこか狐を思わせるその笑顔に私は昏倒した。

翌日、私は近所の神社にお祓いに行った。

出てきた巫女は昨夜の少女だった。

「あら、刑事さん、こんにちは」

私はまた昏倒した。

神成様（カミナリサマ）の話

その昔、山沿いの村では神隠しにあった子を「神に魅入られ、神の眷属になった者」「神成り」と称して祭る因習があった。

なんでも伝承では「神成りを生んだ家は栄える」とされており、ひとたび神隠しが起これば、家人は宮大工を呼び家の一室（または押入れ等）を「社」とし、「神成り」の輩出を「家の誇り」と喜んだという。

この神成様…現在では社を持つ家は数える程度だが、当時村では《多くの社》が作られたと伝えられている…

*社の中には御神体（柱型の墓石）がある。

！この作品はフィクションですが、神隠しにあった人を神にするという出来事は実際にあったそうです



バイクで旅をした時の話

突然の大雨に、どこか雨宿り先はないか、と辺りを見回していると、丁度良く廃村を発見した。

急いで軒先に駆け込み、更に強まる雨模様にはホッと息をつく。

無人の廃村。

人の生活音は無く、ザーツと地面を叩きつける雨音だけが、この世界全てを満たしていた…

…と、雨音に混じって家の奥からボソボソと人のささやき声が聞こえた。

びつくりして振り返り、外れた戸のその奥の暗闇に目を凝らす。

へまさか人が住んでいるのか…？

しかし、いくら目を凝らして見ても人のいる気配はまったく感じられない。

にも係わらず、ボソボソとつぶやく声は聞こえ続けた。

「…まさか…幽霊…」

その時の私は、恐ろしさよりも好奇心の方が勝っていたらしい…

声の主を探す為にゆつくりと屋内を進んだ。

やがて謎の『ボソボソ』がなんと言っているか分かる程、進んだ時、一台の古びた携帯ラジオを発見した。

「次のニュースです。先日…」

「なんだ…ラジオか…」

謎が解けた事に安堵し、同時に少々がっかりした。

もしかしたら怪現象にめぐりあえるのでは、と期待していたのだ。

「やっぱ幽霊なんかないか…」

外に戻る為、屋外へと歩き出す。

その瞬間、私はふと、新たな疑問をもった。

へそのラジオは携帯式だ。コンセントにさすケーブルは無く、電池は当に切れているはずなのに何故、音が出るのだろうか…

恐る恐る、振り向き、ラジオを見つめる。

へそ、そうか！この周辺に電波塔があるに違いない

いつぞやのテレビでやっていた『強力な電波を受けたガードレールからラジオの声が聞こえる』
というのを思い出した。

へきつとこれもそういった類（タグイ）のモノだろう

そう思った瞬間、ラジオから一段と大きな音が聞こえた。

「…チガウヨ…」

私は一目散にその場を離れた。



BTRC20/17

のぼろ
〇〇の話

帝国少年作品集 ベルファダイ/TRC 20

2025年10月8日第1版第1刷発行

著者、及び発行者 **TEI**

Copyright ©TEI 2025 All Rights Reserved

PRINTED IN JAPAN

この作品集について以下を許可します。

- ・複写, または複製する。
- ・それを所持する。
- ・それを公開する, または配布する。

公開, 配布する際の注意。

- ・著作権は放棄しません。著作権はTEIに帰属します。
[公開, 配布をするだけで勝手に著作権が譲渡されてしま
う様なサイト]等にはUPしない様ご注意ください。
 - ・作品集の内容を変えないで下さい。
- また, 作品集の全てを一括で公開, 配布して下さい。
必ず奥付も含めてください。
- ・展示, 配布の媒体は, 何でも構いません。

